

装幀あって、書物

「造本装幀コンクール」の変遷と役割*

「書物は装幀によって記憶される」とは、紀田順一郎氏の至言である¹⁾。

1966（昭和41）年、「出版・印刷・製本産業の向上発展を目的」に一冊の本（書籍）の造本、装幀、印刷、製本を総合的に審査し顕彰する「第1回造本装幀コンクール展」²⁾が開催され、2016年で50回を迎えた。出版業界挙げての公募による唯一のコンクール³⁾であるが、その変遷と役割はほとんど知られていない。電子書籍の時代を迎え“紙の本”が厳しい状況に置かれている現在、造本装幀⁴⁾の役割はますます重要性を増している。

優れた造本装幀の本を顕彰しその素晴らしさを広く伝えることは、出版の未来、殊に“紙の本”の普及にとって極めて重要な要件である。50回を迎えたこの機会に、その前史を含めて本コンクールの変遷を明らかにし、今後の装幀（史）研究に資するよう、まとめておきたい。

「造本装幀コンクール展」前史

装幀相談所の設置と装幀美術展

「第10回造本装幀コンクール展」（1975年）のパンフレットに「戦後の装幀の歩み—装幀美術展のことなど」を寄稿した美術史家の匠秀夫（1924～1994）は、戦後の

装幀の歩みを考えるとき「博報堂が開設した装幀相談所の活動を想起する必要がある」「それは“本は文明の旗だ”として、版画製作とともに装本美術の向上に生涯をかけた、恩地孝四郎の活動を回想することであり、またこの装幀相談所の主要事業で、以後五回まで続いた装幀美術展の趣旨を発展・継承したのが、造本装幀コンクール展であろうからこの展覧会の足跡も記憶されるべきことであろう」と記している。

戦後、1948（昭和23）年頃、「出版界が本格的な活動をはじめようとしていたのを機会に、『美しい、よい本をつくる』ことを提唱し、戦後混迷の中に打ち忘れられていた造本への関心を高め、併せて本格的な書籍装幀による出版文化の向上」を願って、1949（昭和24）年1月、博報堂が社内に「装幀相談所」を設置した。所長は評論家の新居格（1888～1951）、副所長は版画家・装幀家の恩地孝四郎（のち、所長。1891～1955）。その事業内容は装幀相談、装幀家の推薦、装幀資材の改善研究や年1回の装幀美術展の開催、年次装幀美術賞の選定などであった。⁵⁾

「装幀美術展は各出版社から出品された図書を、一般・専門・児童の三部門（四回展からは文芸を加えて4部門）にわけ、原画と

ともに展示し、装本に関心の深い文学者・装本画家・美術評論家・出版協会の代表の審査によって、各部門二位までの優秀装幀図書を選び、装幀者と出版元に装幀美術賞を贈る」というもので、第1回展は1949（昭和24）年4月に日本橋三越本店で開催され、1953年の第5回展（この年は特に文部大臣奨励賞を設定、また特別出品として「恩地孝四郎装本30年回顧展」を併せ展示）まで続いた。⁶⁾

日本書籍出版協会の動き

1965年頃、日本書籍出版協会（略称・書協）の「十周年行事研究委員会」では、“造本装幀コンクール”を10周年を期して行い、以後毎年続けていく案が検討されたが（「書協No.106」1965年10月）、「装幀造本コンクールは、他業種でも実行できるものであり、諸般の事情を考え合わせて」見送られた（「書協No.111」1966年3月）。しかし、その直後、1966年に印刷時報社主催・博報堂の協力により第1回が開催され、書協は3年後（第4回）に主催者の一翼を担うことになる。書協の“諸般の事情”が見え隠れする。

この第4回から打ち出された「より美しく、よりよい本づくり」という標語は、「装幀美術展」の「美しい、よい本をつくる」を受け継いだもので、募集・審査方法や審査員の構成なども基本的には踏襲されている。匠秀夫の指摘どおり、「造本装幀コンクール展」は「装幀美術展」の趣旨を「発展・継承」していることがわかる。

*日本出版学会春季研究発表会（2017年5月13日、東京都三崎町・日本大学法学部）予稿集一部改編して転載

造本装幀コンクール 50 回史

第1回から3回までの「紙上展示」掲載誌と第4回のパンフレットのコピーおよび第5回以降のパンフレットの「合本」が、幸いにも日本書籍出版協会に保存（おそらく唯一の全冊揃いと思われる）されていたので、この「合本」、関連資料、関係者の証言などをもとに「造本装幀コンクール」を分析・考察した。そこに3つの大きな転換点と、50回を支え推進してきた5つの要因が浮き彫りになった。

3つの転換点

(1) 主催者の交代

1966年、印刷時報社主催・博報堂の協力により第1回が開催（紙上展示のみ）され、第2回は同前、第3回は日比谷図書館・日本印刷工業会が主催した。第4回（1969年）からは、前述のように日本書籍出版協会、および全国製本組合連合会・日本印刷工業会による主催、文部省・通商産業省・東京都教育委員会の後援となり、現在の原型ともいべき形となる（百貨店・書店等で展示）。

(2) 展示会場の変更

1992年（第27回）から、従来「読書週間」の催しの一つとして百貨店や書店等で開催されていた展示会が「東京国際ブックフェア」（TIBF）の会場内へと移った。第28回以降は併催行事と位置づけられ⁷⁾、より広い人びとに向けた展示会となり業界の内外へのアピール度が高まった。また、2004年以降、「より開かれたコンクール」をめざす一環として、日本出

版会館で行われてきた授賞式も東京国際ブックフェア会場のオープンスペースで行うことになる。

(3) 審査方法の改革

審査のレベルアップ、社会的認知の広がりをめざして、2003年（第37回）から5次にわたり審査方法の改定などが実施された結果⁸⁾、本コンクールへの信頼度が増した。主な改定点は以下のとおりである。

・2003年、1. 装幀家・デザイナー、学識経験者、読者代表、主催者代表による三賞⁹⁾ 選考委員会を設置する、2. 審査員を一新する、3. 三賞の授賞装幀者にも主催者から賞状と賞牌を授与する、4. 「審査委員会奨励賞」（「三賞に準ずるもので、特に社会変化、読者ニーズに対応した優れた企画力のある作品」と規定）を廃止し、「技術や表現に新しい試みや工夫が施され、今後の展開が期待されるなど、審査員が特に推奨する作品。若手装幀家を育成することを目標とする」「審査員奨励賞」（10点以内）を新設。

・2004年、1. 三賞選考委員会に印刷・製本の専門家アドバイザーを加える、2. 下見時間を増やす。

・2005年、三賞以外の授賞装幀者に対しても主催者から賞状・賞牌を授与。

・2006年、日本印刷産業連合会会長賞のうち、印刷・製本技術に特に優れた作品を評価する「印刷・製本特別賞」を新設。

・2007年、「審査の精度」「信頼と認知」を高めるために、1. 主催者（2代表）が三賞選考委員会から外れ、新たに学識経験者1

人を加える。2. 従来は三賞審査終了後にその他各賞を決定する方式であったが、責任の所在を明確にするため各賞審査を先行させ、三賞は各賞の入選作品決定後に三賞選考委員会を開き決定（重複授賞可）する方式とする。

5つの要因（推進力）

(1) 「世界で最も美しい本コンクール」への出品

1970年（第4回）以降、入賞作品が日本を代表してライブツィヒの「世界で最も美しい本コンクール」¹⁰⁾ へ出品されることになり、多数の入賞実績¹¹⁾ によって本コンクールの評価を高める。

(2) 印刷博物館との連携

2006年、印刷博物館は「造本装幀コンクール第40回記念展 日本とドイツの美しい本2005」を開催し、両国の入選作品を展示した。2008年からは「世界のブックデザイン」展へと発展し、「世界で最も美しい本コンクール」をはじめ各国のコンクールで入賞した作品などを紹介、現在に至る¹²⁾。さらに2012年からは「造本装幀コンクール受賞者『受賞作』を語る」と題するトークショーを開催するなど、本コンクールの社会的認知度アップや質的向上に貢献する。

(3) 国立国会図書館の「原裝保存コレクション」

2013年、国立国会図書館が（平成25年度から）原裝のままの保存用複本の収集を開始した。「出版文化史上、あるいは造本・装丁上意義があり、将来に示唆を与えると考えられる国内刊行図書」を保存、当面は本コンクールへの出

品作品のみが保存対象となった¹³⁾。第47回(2013年)以降の応募作品は、審査会を経て東京国際ブックフェア展示後に寄贈され「原裝保存コレクション」として外装(カバー・帯)を含めて保存されることになる。画期的な試みで、応募動機としての要素は極めて大きい。

(4) 後援官庁・団体の継続的支援、協力：官庁は賞の設定、団体は賞の設定と運営費の一部拠出

・1969年(第4回)文部大臣賞(のち、文部科学大臣賞)、通商産業大臣賞(のち、経済産業大臣賞)、東京都教育委員会賞(のち、東京都知事賞)

・1971年(第6回)読書推進運動協議会賞、ユネスコ東京出版センター賞(のち、ユネスコ・アジア文化センター賞と改称。2011年まで)

・1972年(第7回)日本図書館協会賞

・1985年(第20回)出版文化国際交流協会賞

・2010年(第44回)出版文化産業振興財団賞

(5) 協賛会社・団体の協力：協賛金の拠出と事務局運営を担当

・1969～1993年(株)印刷時報社

・1994～2009年(株)印刷出版研究所

・2010年～(財)出版文化産業振興財団

「東京国際ブックフェア」の展示会場費は、1994年(第29回)以降、運営会社リード・エグジビションによる優待提供。

**TANAKA, Mitsunori

元・平凡社取締役

前・日本書籍出版協会事務局長

(お問合せは本誌編集部まで)

「紙の本」の魅力

Web書店隆盛の時代、新刊書を扱う書店が地元のない自治体が全国で4市を含む332市町村ある。2000年以降、毎日、書店がほぼ1店ずつ消えている現在¹⁴⁾、直接、本に触れる機会がますます減っている。書店で思わず手にしてページを開く。“紙の本”の魅力は何とんでも手触りにある。学校や公立図書館の本はフィルムによるコーティング(装備)がなされていて、函はもちろん、直接、表紙やカバーに触れることはできない。¹⁵⁾

“紙の本”の未来は造本装幀にかかっているといっても過言ではない。造本装幀については、これまで主として印刷、製本、製紙などの技術との関係から、あるいはデザイン・美術(史)面から論じられてきたが、編集・販売・宣伝など出版の側からのアプローチも必要ではないかと思う。本論がそのきっかけになれば幸いである。

(田中光則**)

【注】

1) 紀田順一郎「造本装幀の重要性」『第7回造本装幀コンクール展』(パンフレット)1972年p.4

2) 2008年(第42回)、「造本装幀コンクール展」の名称は「造本装幀コンクール」に変更された

3) 他に、出版文化賞〈ブックデザイン賞〉(主催・講談社。1970年に創設、推薦作品から毎年1点を選定・表彰)、ADC賞〈ブック&エディトリアル部門〉(主催・東京アートディレクターズクラブ)、竹尾賞〈デザイン書籍部門〉

(主催・株式会社竹尾)、日本ブックデザイン賞(主催・秋山孝ポスター美術館長岡)がある

4) 「装幀」が一般的には、表紙やカバー、帯、見返し、トビラなど外回りの表層に限定したデザインを指して使われるのに対して、「ブックデザイン」(「造本」という場合もある)は、本のテキストにふさわしい本文組の体裁を含めたトータルな取り組みを指している。内容にかなう書体、行数、一行の字数、適正なノンプルの位置の決定および設計などを併せたデザインである(白田捷治『装幀列伝—本を設計する仕事人たち』、平凡社新書、2004年pp.7-8)

5) 博報堂、装幀相談所の変遷について、月刊印刷時報、1966年10月号(269号)pp.100-101

6) 匠秀夫「戦後の装幀の歩み—装幀美術展のことなど」『第10回造本装幀コンクール展』(パンフレット)1975年pp.60-66

7) 日本書籍出版協会事務局長樋口清一氏の調べによる(1992～95年に発行された「書協」の関連記事から推定)

8) 主として第37回(2003年)

業界最新ニュースなら 無料オンラインマガジン 週刊『印刷雑誌』

★閲覧は株式会社印刷学会出版部のサイトから!

★毎週月曜日10:00発行
(休日の場合は翌日)

★メール会員大募集!

「会員希望」で空メール

→ shukan@japanprinter.co.jp

発行：株式会社印刷学会出版部

～41回(2007年)のパンフレットに掲載されている児玉清審査委員長の各回「講評」にもとづく9) 顕彰上位賞の文部科学大臣賞, 経済産業大臣賞, 東京都知事賞の三賞

10) 1963年に東ドイツのライプツィヒで書籍業組合の主催で始まり, 東西ドイツ統一後の1991年からはドイツ・エディトリアルデザイン財団が主催する権威ある国際ブック・デザインコンクールとなる。金の活字賞1点, 金賞1点, 銀賞2点, 銅賞5点, 栄誉賞5点が選定される(寺本美奈子「出版大国ドイツの二つのブック・デザインコンクール」『Printing Museum News Vol.18』p.4)

11) 最高位「金の活字賞」の受賞は3回ある。1973年『アポロ百科事典』(全3巻)(出版者:平凡社, 編者:平凡社, 装幀:原弘, 印刷:東京印書館, 製本:和田製本工業), 1990年『年鑑 日本のグラフィック1989』(出版者:講談社, 編者:グラフィックデザイナー協会, 装幀:亀倉雄策, 印刷:大日本印刷, 製本:黒岩大光堂), 2005年『日本の近代活字

元木昌造とその周辺』(発行者:NPO法人近代印刷活字文化保存会, 装幀:勝井三雄, 印刷・製本:インテックス)。

12) 凸版印刷(株)印刷博物館『年報印刷博物館2008-2010』2013年

13) 「紙や印刷技術, そして時代を反映する意匠を後世に伝える, 本という三次元の物体の記録として伝承していきたい」としている(大塚奈奈絵「図書資料の原裝保存について」『国立図書館月報639号』2014年6月pp.10-11)

14) 毎日新聞「書店空白332市町村」2015年1月5日

15) 国立国会図書館では, 「通常, 外箱やカバー, 帯等を取り外して保存・提供しています」「当館のように大量の資料を永久保存する場合, フィルムによるコーティングが長期的に資料にどのような影響を与えるかが確認されていないことなどから, 一部資料を除き, この方法は採用していません」としている。(大塚奈奈絵「図書資料の原裝保存について」『国立図書館月報639号』2014年6月p.10)

【参考文献】

第1～3回:月刊印刷時報,印刷時報社,1966年10月号(269号),1967年10月号(281号),1968年10月号(293号)

「造本装幀コンクール(展)」パンフレット第4～50回

「書協」,日本書籍出版協会機関紙『日本書籍出版協会十年史』,日本書籍出版協会十年史編纂委員会編,1967年

「50年史」,日本雑誌協会・日本書籍出版協会50年史編集委員会編,日本雑誌協会・日本書籍出版協会,2007年

恩地孝四郎『本の美術』,誠文堂新光社,1952年。1973年に出版ニュース社から復刊

白田捷治『現代装幀』,晶文社,1999年

白田捷治『装幀時代』,美学出版,2003年

白田捷治『装幀列伝』,平凡社新書,2004年

『出版事典』,布川角左衛門ほか編出版ニュース社,1971年

印刷に興味のある学生、印刷会社の新入社員、再度基本を学ぶ方々へ。印刷の初歩を、判りやすく解説!

電子書籍版・印刷技術基本ポイント シリーズ

印刷現場のトラブル
シューティングに!



新人教育に!



Book-Stack

Search

ご購入は、<http://www.book-stack.com/> で!